

憲法守る声さらに大きく 強行された戦争法、廃止させよう！

9月19日、参議院で戦争法案（安保法制）が強行採決されてしまいました。かつてない規模に広がった反対運動、憲法学者から若者まで、各階層・各分野の国民の中からわき上がる「憲法違反の戦争法案は廃案に」の声を聞くこともなく、自民・公明の安倍政権は暴走を続けています。

法律が通ったからと諦めることなく、日本がアメリカの戦争に協力させられる、自衛隊が武力をもって海外に出かける、という戦争法の具体化をさせない運動、そして、次の選挙で安倍政治にノー！の結果を出すために、引き続きがんばりましょう。



9月13日、四日市での大集会とデモに参加

鈴鹿で初めての集会・デモに市民300人参加

8月30日、国会前に12万人が集まった日、鈴鹿でも弁天山公園で戦争法案反対の集会・デモが行われました。300人の市民が参加、鈴鹿市では初めてのことです。また、白子駅前やベルシティ前などでも、何度もプラカードやのぼりを持っての活動が行われました。そして、9月13日には、三重県弁護士会が呼びかけた大集会・デモに、800人以上が各地から集まり、盛り上がりました。そのどれもが、組合などの「動員」ではない、一般市民が多く主体的に参加している姿は、かつてないことです。

あまりにもひどい安倍政治の暴走が、多くの国民の中に「平和憲法の大切さ」や「政治にもの言う権利 = 主権在民」を再認識させたのです。

高い国保税、来年度も引き上げるな

9月議会一般質問で、国民健康保険の問題をたどしました。鈴鹿市は、本年度（2015年）に国保税を15%引き上げる案を出していましたが、昨年末に撤回し、今年度は値上げなしとなりました。試算では6億5千万円の赤字と予想していましたが、「被保険者に過度の負担をかけないということに重点を置いて」判断した。つまり、赤字を市民に転嫁しないとしたのです。

今年赤字を市民に負担させないが、来年は？

私は、今年の国保税を引き上げなかったことは良かったが、来年度に向けても、市民の暮らしや所得が向上する見通しはないので、引き続き据え置くことを求めました。市長答弁は、「国保財政は非常にきびしく、来年度以降の引き上げは避けられない」「引き上げに際しては、被保険者の負担感に十分配慮しながら、慎重に検討」と、引き上げの意向を示しました。私は、「今年引き上げなかった状況が変わらないなら、来年度も引き上げはできないと判断するしかない。」「今年選挙があったから引き上げなかった、選挙が終わったから来年は引き上げる、ということではおかしい。」と、再考を求めました。

「持続可能な」市民生活のため、財政支援を

国保制度は「助け合い」ではなく、「社会保障」の制度としての国民皆保険のいちばん基本です。負担能力の低い人でも医療が受けられるためには、負担能力に応じた国保税にすること、そのための財政的な支援が必要です。

国は「持続可能な医療保険制度」といって国保の住民負担をさらに上げようとしていますが、いま必要なのは「持続可能な市民生活の保障」です。

過去の法人市民税を10億円返還、市財政に影響も

9月補正予算に、ホンダへの法人市民税の返還金、総額で9億6240万円が計上されました。これは2004年に過去5年分の海外子会社の利益を「親会社に帰属する」として東京国税局が課税した事件が、裁判で国が敗訴したのに伴い、市も返還するものです。内訳は、本税が6億円余、延滞金や還付加算金が3億円余。しかし、来年の地方交付税に税収減としてカウントされて

戻りそうなのは本税のみ、とのこと。鈴鹿市に何の責任もない、10年も前の税金を返還させられるとは、理不尽です。グローバル大企業に有利な税制がよく問題になりますが、今回の件は驚きでした。

「空家」問題、2年かけて実態調査

昨年の3月議会で私は、「空家条例」の制定を提案しましたが、その後、国会で「空家対策特別措置法」が制定され、今年5月から施行されました。その第一歩として9月の補正予算で、今年から2年かけて市内の空家の実態調査をする予算1500万円が計上されました。

放置されて危険な「特定空家」への対策を重視

市はこの調査でデータを整備し、「空家等対策計画」を作って空家の管理や活用についての対策をすすめます。とくに今も問題となっている、放置された空家を「特定空家」に指定して、除却、修繕などの措置の助言、勧告、命令、強制執行などの権限をもつことができます。

しかし、空家といっても私有財産であり、実際には所有者との交渉など手間がかかりそうです。また、これから毎年増えていくことが予想される空家を、一回の実態調査だけでなく毎年つかんで追加していく必要もあります。

なつかしい田んぼの風景「すずみ」

秋の長雨で遅れていた稲刈りがやっと終わり、新米がいただけるようになりました。わが田の今年の出来は、8俵半とまあまあ豊作でした。

これはこの地方では「すずみ」と呼んでいて、ワラを束ねて組み上げる保存の仕方です。昔はどの田にも「すずみ」があって、秋から冬の風景でした。子どもの頃はこのすずみに登って飛び移ったりして遊びました。

今はもう「すずみ」を上手に作れるのは、お年寄りだけです。



ずいそう



「満蒙開拓団」の悲劇

9月6日に津市で上映された映画「望郷の鐘」は、かつて日本が中国の東北地方に作った傀儡（かいらい）国家「満州」へ、開拓団として渡った農民たちの苦難の記録である。主人公の山本慈昭氏は、長野県阿智村にある長岳寺の住職で、シベリア抑留から奇跡的に帰国し、その後、中国に残された子ども達の調査、帰国に尽力し「中国残留孤児の父」と称された人である。

「新天地」どころか侵略政策の「人間の盾」

この映画の日本側の舞台となった阿智村、長岳寺のそばに建つ「満蒙開拓平和記念館」を訪ねてみた。展示された資料や、まだ存命の体験者の証言などから、知らなかった事実が多く発見できる。

1932年に建国された満州国に、日本の疲弊した農村から開拓団として、敗戦直前までに約27万人が送り込まれた。いちばん多かったのは長野県の3万7千人、その4分の1が阿智村などの下伊那地方からだった。山本氏らの組が渡ったのは45年5月、もう東京大空襲のあとで敗戦必至の時期だというのに、知らされることもなかった。

「開拓」といっても、現地に着いてみると家も畑もあり、元から住んでいた住民を追い出して土地を奪った上に、現地人を小作や使用人にして使うなど「侵略」行為そのものである。「五族協和」などは建前、日本人が「一等国民」という差別支配をしていたから、敗戦後、各地で暴動に襲われた。開拓団は、「新天地」などと騙されて行かされた「被害者」であり、同時に中国人を略奪し支配した「加害者」という両面を持っていたのである。

満州には、都市部を中心に、敗戦時に150万人もの日本人が居留していたという。その中でも満蒙開拓団はもっとも北のソ連国境近くで、敗戦後に取り残され、いちばん悲惨な運命をたどった。戦後70年、決して忘れてはならない歴史である。



満蒙開拓平和記念館の入り口